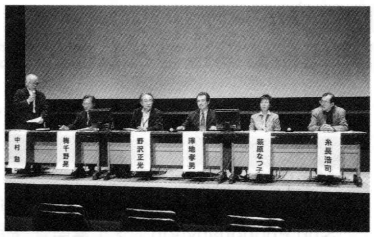
JIA建築家大会2007東京　20周年記念大会「環境の世紀と建築家」 2050年再生に向けて

10月17日～20日開催　＜大会リポート第2弾＞


パネルディスカッション「2050年再生に向けて」

「環境建築は今！」×「2050年をデザインする」クロストークセッション

今月号では主な大会プログラムのリポートと、今大会のテーマを冠した「集中プログラム」シンポジウムについて掲載する。「集中プログラム」では講演とパネルディスカッション、さらに2会場で「トークセッション」と「クロストークセッション」を開催。そこでは、“2050年をデザインする” ために、どんなメッセージが発せられたのか。大会テーマの起草者である中村勉氏（環境行動委員会委員長）、クロストークセッションのモデレーターを担当した井口直己氏、そして松下電工（汐留）の展示で約72個の90×90×20～40cmの展示のコーディネートを担当した篠節子氏に、今大会を総括していただいた。

2050年のデザインに向け、多分野の人たちの力を束ね、イニシアティブを取るのは建築家である。

中村「JIA大会と来るUIA東京大会のテーマを『2050年』とした理由は、バックキャスティングの方法で新しい価値への転換を図ろうと意図したものです。既存の社会システムから出発した50年後では、CO_2排出量の例でも、現在を100としてどれだけ減らすことができるかと考えると、20～30%減ぐらいで止まる。それに対して、2050年にはCO_2半減目標を示し、その社会のイメージを想定し、そこに到達する最短のルートで可能な仕組みを考えれば、具体的なロードマップが描けるのです。これを現実にする知恵や方法論を研究しようとするのが「2050年をデザインする」展の意図です。

昨年の11月、国連大学でスターン博士が、今始めれば、GDP（経済成長）1%で地球を救うことができると提案しています。環境立国戦略で提案した環境理想都市シミュレーションが予算化されてきましたので、建築学会で対応しようとしています。これができればおもしろくなると考えています。大きなテーマはこのようにして生まれ、2050年を表面に出すことのインパクトは強かったと思うし、結果的にそれなりに成功したと思います。

今回、さまざまな分野のパネリストに参加いただきました。トップバッターには生物多様性の専門家である鮎川ゆりかさん（WWF）が、すべての生物を守ることの意味、それが人間環境を守る上で重要であること。またIPCCの専門家・西岡秀三さん（国立環境研究所）は、2月に発表した70%削減を目指す超炭素社会のシナリオづくりをお話いただきました。お二人には問題提起をしていただきましたが、大変よかったと思います。その後、大野秀敏さん（東大大学院教授）以下、解決の提案を次々にしていただきました。

2050年問題は温暖化問題だけでなく、少子・高齢化社会、資源の枯渇、水、穀物、団地再生、交通問題などがあり、これに対して、具体的提案など、今考えられるいろいろな方法を議論したということが大事なポイントだったと思います。」

篠「実は、展示をされた方も、会場で、挑戦する作品や深い思慮のある作品などをトータルに見てはじめて、「2050年をデザインする」での自らの展示の意義がやっと分かったと言っていました。今回、JIAの建築家たちだけで環境を語るのではなく、展示者を多分野から選んだということが大切で、さまざまにチャレンジしている人たちと建築家は連携して活動する必要があると思います。」

井口「クロストークセッションは、『環境建築は今』と『2050年をデザインする』の2つの展示の出展者がクロスして2050年への課題が浮き彫りにされるという意図があるのですが、もう一つ、タテのクロスとして、北から南までの地域事情や、行政や研究者と実務の人の考えもクロスさせたいという意図もありました。環境の議論は一方の主張だけでは仕方がないので、それぞれストック、建築、都市をテーマに3セッションで延べ6時間の熱い議論が続いて、とても有意義だったと思います。」

中村「高橋靭一さんの話にもあるように、自分は環境建築と認識していなくても、結果として十分に環境建築に値することをやっていることが大事なことです。今は環境建築がクローズアップされていますが、スウェーデンのように基本的性能をしっかり作れば、自然とエネルギーを使わない建築になっていくそうです。そういうことが建築家の作法だと思います。その上で今後の環境設計に取り組む場合には、定量的に数字で評価できる「何%CO_2削減、エネルギーはどれくらいだ」というようにきちんと数値化し、それを頭に入れてエネルギーフロー設計をやるべきだと思います。そうすると自分はどのレベルの環境建築をやっているのかということが分かってくるのです。

2050年のデザインに目を向け行動していくことで、建築家の役割や仕事の重大さは目に見えてくるし、社会的にも評価されていくはずです。そう考えると、JIAが今まで提案してもなかなか獲得できなかった、入札や建築家の資格の問題も、「環境という切り口」に視点を置けば解決の糸口が見えてくると思うのです。今度の環境配慮契約法もそうです。建築家の信頼を回復することが大切なことで、地球環境に対して建築家がしっかりした考え方を示し、皆が力を合わせて協力しようとしている姿を社会的に見せることが重要なことなのです。建築家の資質というのは、環境工学などさまざまな人たちがやってきた多様な分野の物事を捉え、全体的に判断してより良い方向に導いていく力があります。これこそリーダーシップをとるべきJIA建築家の役割だと思います。」